

2 子供・若者が抱える困難

(1) 社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験

Q5. あなたは今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験があったと思いますか。[SA]

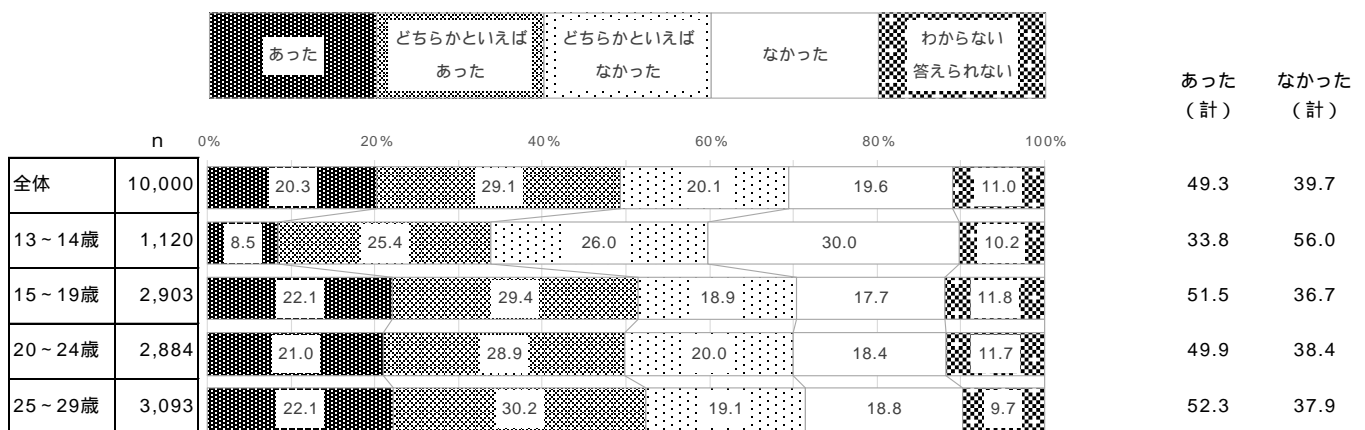
社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験の有無について全体で最も高いのは、「どちらかといえばあった」(29.1%)。次いで「あった」(20.3%)と続く。また、「あった(計)」(49.3%)は「なかった(計)」(39.7%)よりも高くなっている。

年齢区分別でみると、「あった(計)」は「25～29歳」(52.3%)が最も高く、全体と比較した結果、有意差が認められた。

一方、「なかった(計)」は「13～14歳」(56.0%)が、全体と比べ15ポイント以上高く、有意差も認められた。

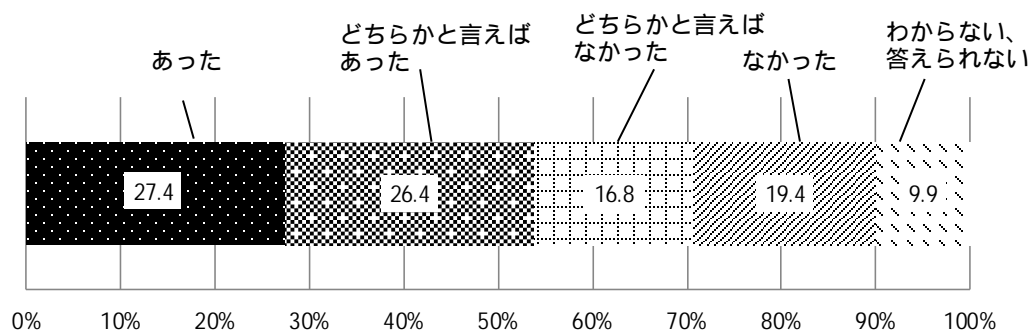
過去の調査と比較すると、「あった」の変化が最も大きく、7.1ポイント減少している。また、「あった(計)」は4.5ポイント減少している。

一方、「どちらかといえばなかった」と「なかった」はどちらも増加しており、「なかった(計)」では、3.5ポイント増加している。



<平成24年度調査結果>

Q. あなたは今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験がありましたか。最もあてはまるものを選んでください。[SA]



(n=3219)

(2) 社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験をした理由

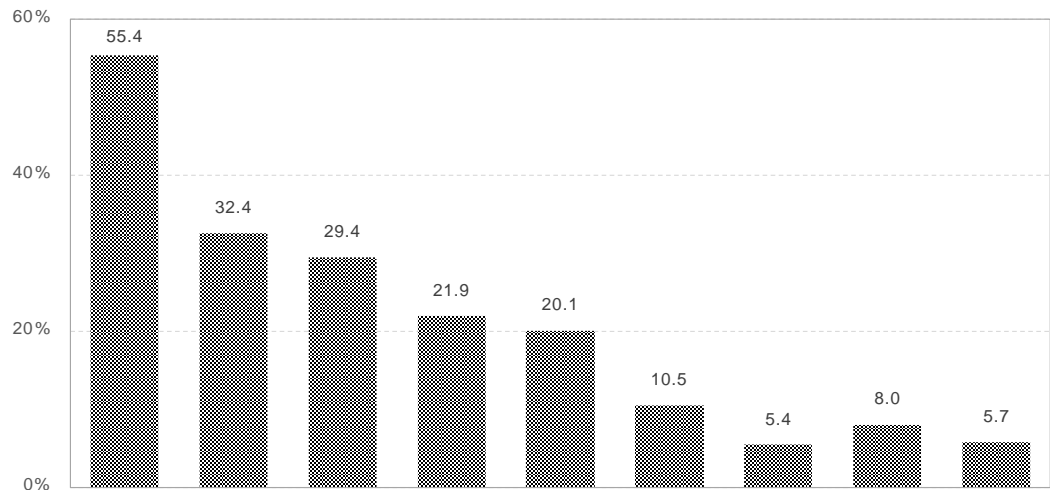
Q6-1-1. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。[MA]

【自分自身】

問題を経験した理由として【自分自身】について全体で最も高いのは、「人づきあいが苦手だから」(55.4%)。次いで「何事も否定的に考えてしまったから」(32.4%)、「悩みなどを相談できなかったから」(29.4%)、「精神的な病気だったから」(21.9%)と続く。

年齢区分別でみると、「13～14歳」は「人づきあいが苦手だから」(41.7%)、「何事も否定的に考えてしまったから」(18.7%)、「精神的な病気だったから」(7.1%)が全体と比べ10ポイント以上低く、有意差も認められた。

過去の調査と比較すると、最も高いのはどちらも「人づきあいが苦手だから」であったが、今回は2.8ポイント増加している。一方、「精神的な病気だったから」、「何事も否定的に考えてしまったから」、「悩みなどを相談できなかったから」の3項目は減少しており、「何事も否定的に考えてしまったから」は、10.9ポイント減少している。



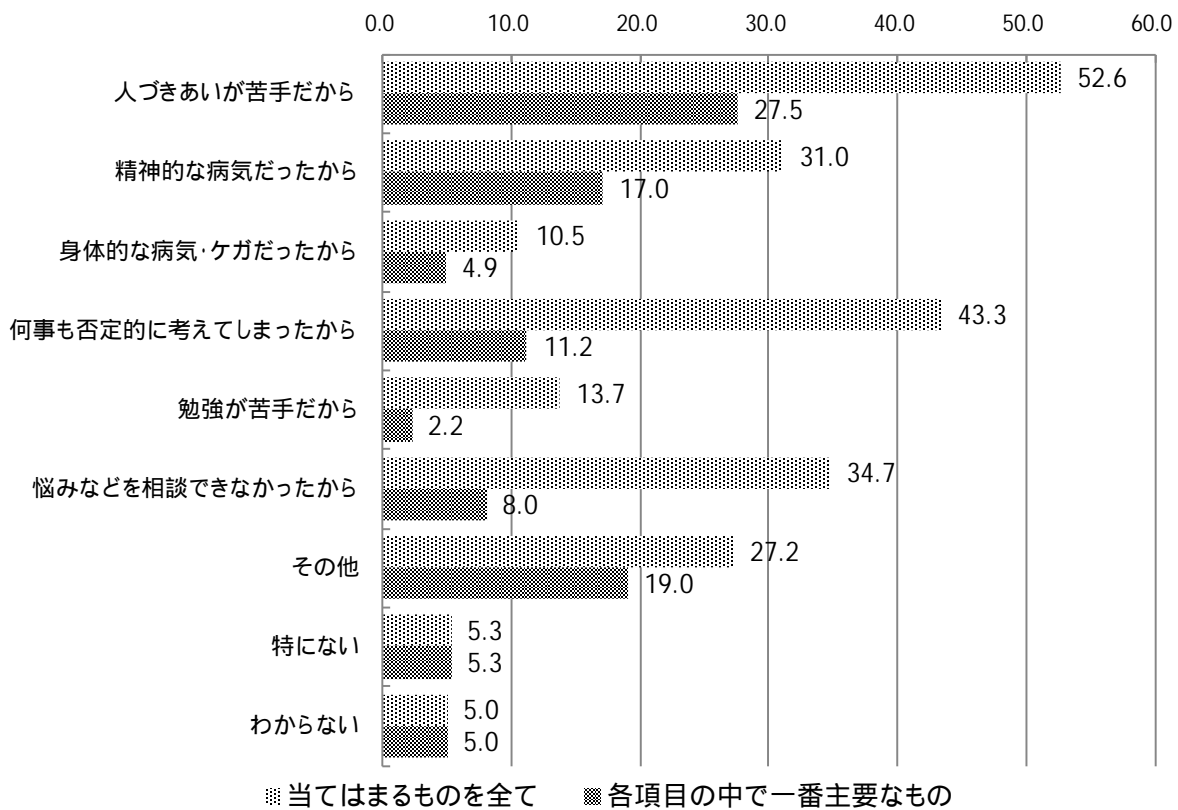
属性	n 数	人づきあいが苦手だから	何事も否定的に考えてしまったから	悩みなどを相談できなかったから	精神的な病気だったから	勉強が苦手だから	身体的な病気・ケガだったから	その他	特にない	わからない
		全体 + 10%以上 全体 - 10%以下 (属性n=30以上)								
全体	4,931	55.4	32.4	29.4	21.9	20.1	10.5	5.4	8.0	5.7
13～14歳	379	41.7	18.7	23.2	7.1	26.4	8.4	6.3	11.3	11.3
15～19歳	1,494	58.4	33.0	25.6	20.3	25.3	11.1	4.5	6.5	6.4
20～24歳	1,439	55.9	34.8	32.2	24.7	18.4	11.1	6.2	7.6	4.7
25～29歳	1,619	55.4	33.0	31.7	24.3	15.2	9.9	5.3	9.0	4.7

Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答

<平成24年度調査結果>

Q. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。当てはまるものを全て選択してください。
また、各項目の中で一番主要なものを教えてください。[MA・SA]

【自分自身】



(n=986)

Q6-1-2. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。[MA]

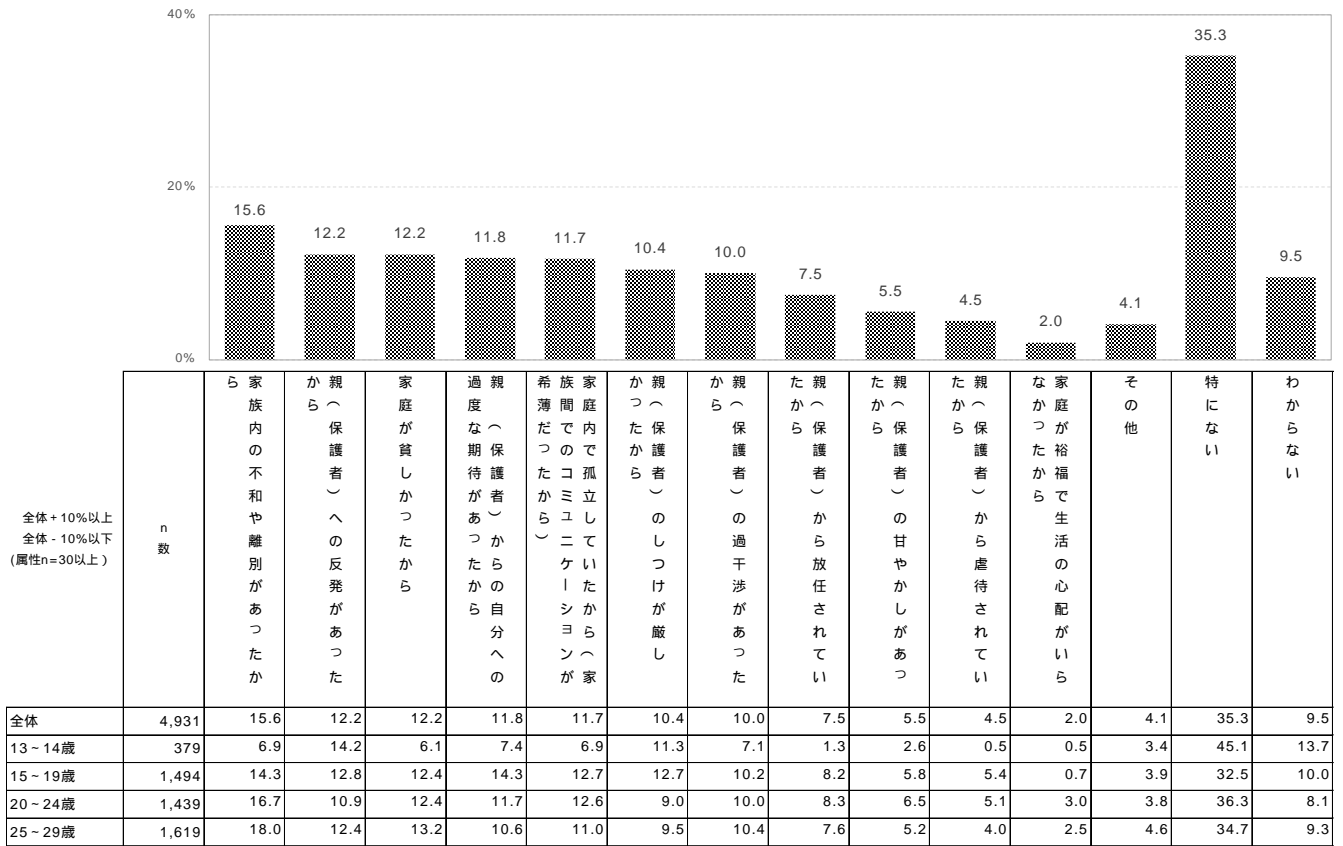
【家族・家庭】

問題を経験した理由として【家族・家庭】について全体で最も高いのは「特にない」(35.3%)、次いで「家族内の不和や離別があったから」(15.6%)、「親(保護者)への反発があったから」「家庭が貧しかったから」(12.2%)と続く。

年齢区分別でみると、「家庭内の不和や離別があったから」は年代が上がるにつれて高くなっており、「13～14歳」(6.9%)と「25～29歳」(18.0%)は、全体と比較した結果、どちらも有意差が認められた。

過去の調査と比較すると、最も高いのはどちらも「家族内の不和や離別があったから」であったが、今回は3.6ポイント減少している。

また、「親(保護者)の過干渉があったから」、「特にない」以外の項目において割合は減少している。

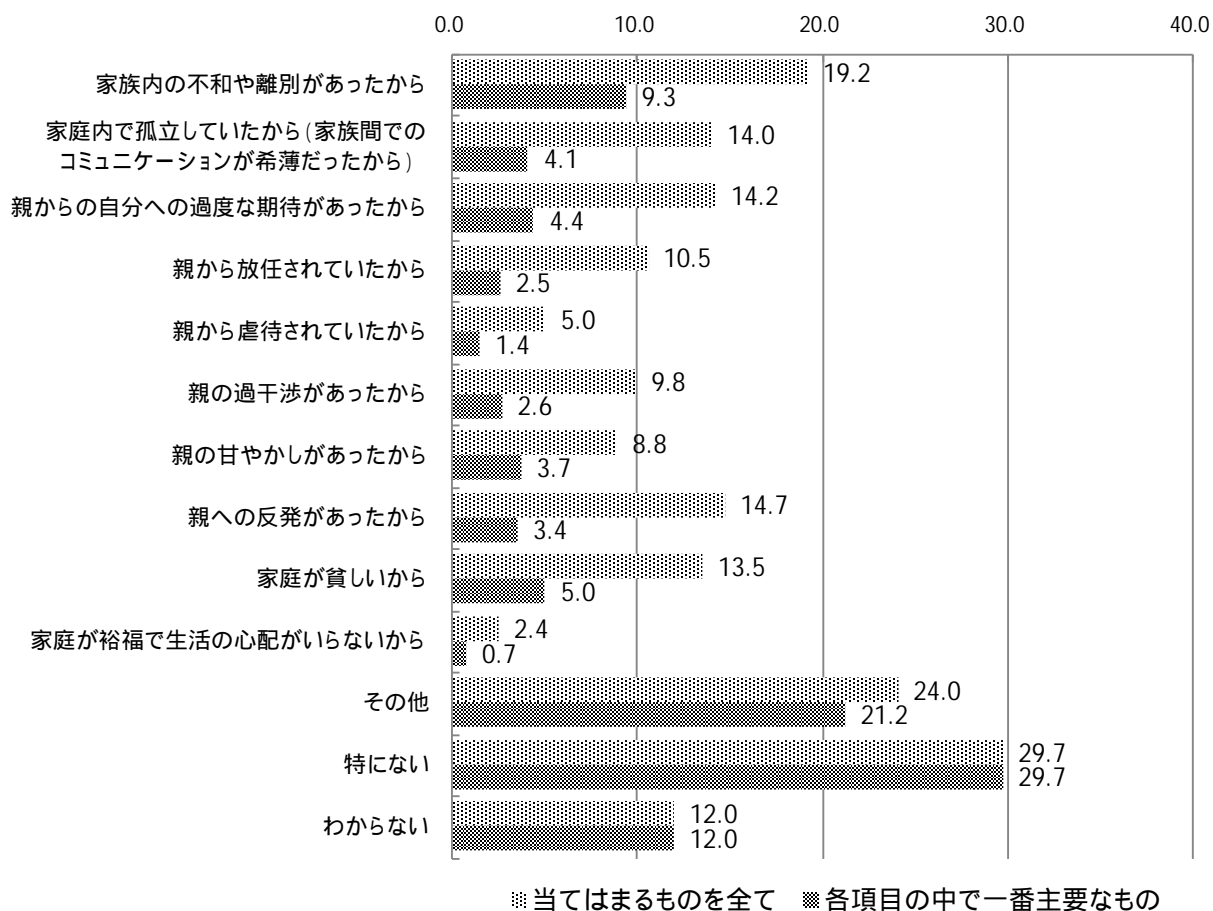


Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答

<平成 24 年度調査結果>

Q. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。当てはまるものを全て選択してください。
また、各項目の中で一番主要なものを教えてください。[MA・SA]

【家族・家庭】



(n=986)

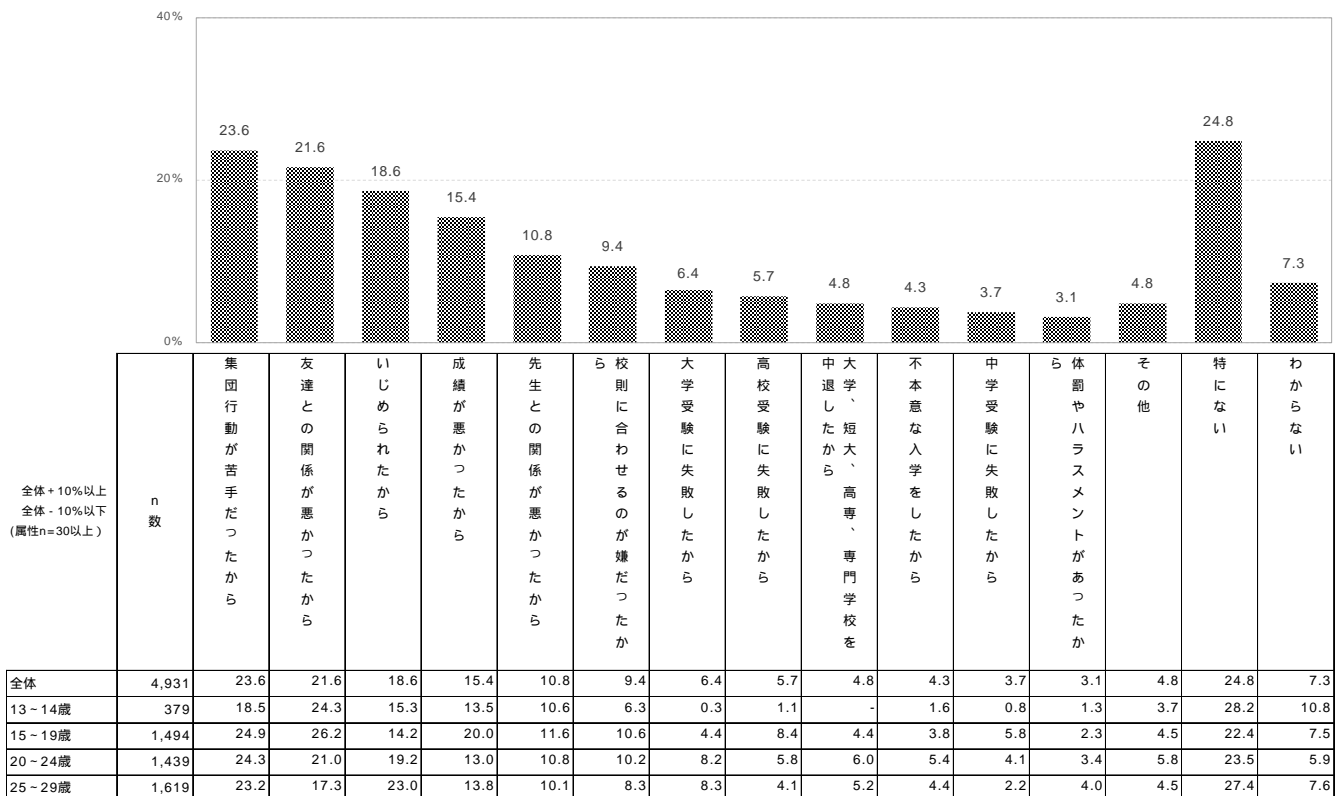
Q6-1-3. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。[MA]

【学校】

問題を経験した理由として【学校】について全体で最も高いのは「特にない」(24.8%)、次いで「集団行動が苦手だったから」(23.6%)、「友達との関係が悪かったから」(21.6%)、「いじめられたから」(18.6%)、「成績が悪かったから」(15.4%)と続く。

年齢区分別でみると、「15～19歳」は「友達との関係が悪かったから」(26.2%)、「成績が悪かったから」(20.0%)、「高校受験に失敗したから」(8.4%)、「中学受験に失敗したから」(5.8%)の4項目が他の年代と比べ高く、全体と比較した結果、有意差が認められた。

過去の調査と比較すると、「成績が悪かったから」は8.1ポイント増加しており、「いじめられたから」は5.0ポイント減少している。

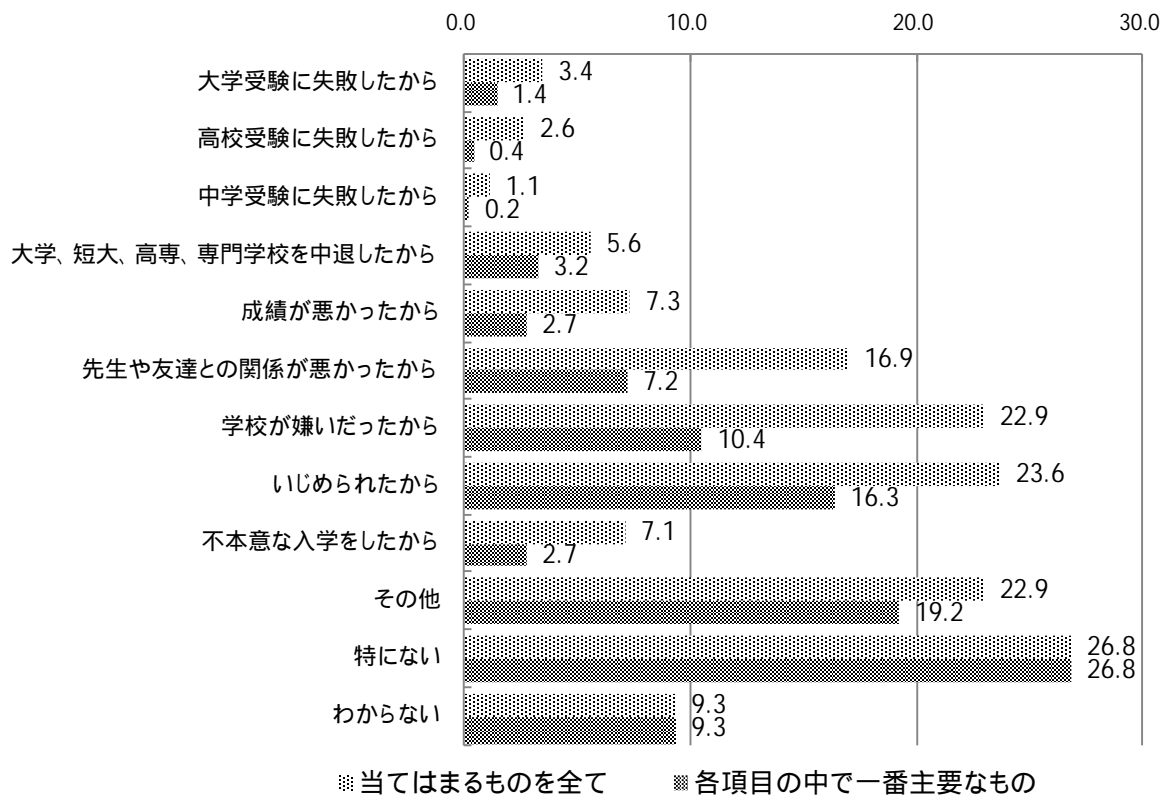


Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答

<平成 24 年度調査結果>

Q. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。当てはまるものを全て選択してください。
また、各項目の中で一番主要なものを教えてください。[MA・SA]

【学校】



(n=986)

Q6-1-4. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。[MA]

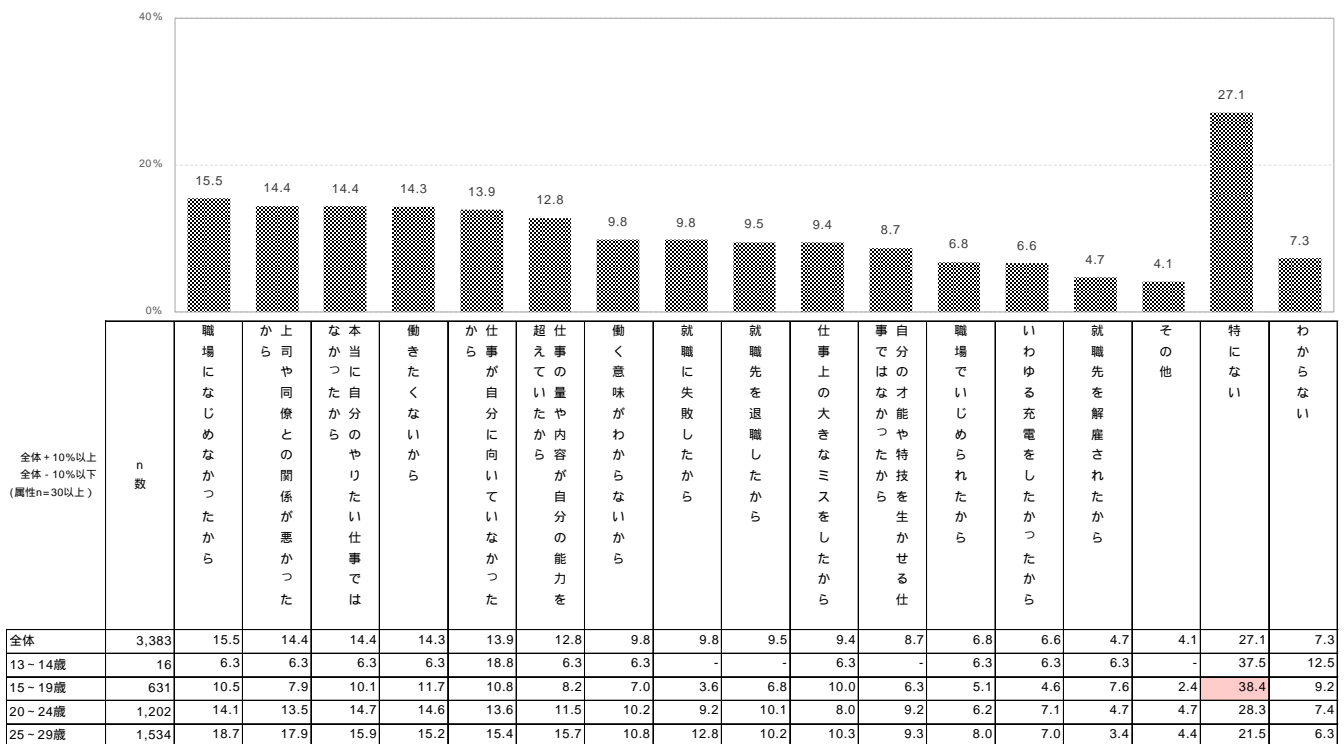
【仕事・職場】

問題を経験した理由として【仕事・職場】について全体で最も高いのは「特にない」(27.1%)、次いで「職場になじめなかったから」(15.5%)、「上司や同僚との関係が悪かったから」「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」(14.4%)、「働きたくないから」(14.3%)と続く。

年齢区分別でみると、“25～29歳”は「職場になじめなかったから」(18.7%)、「上司や同僚との関係が悪くなったから」(17.9%)、「仕事の量や内容が自分の能力を超えていたから」(15.7%)、「就職に失敗したから」(12.8%)の4項目が他の年代と比べ高く、全体と比較した結果、有意差も認められている。

過去の調査と比較すると、ほとんどの項目において減少しており、「上司や同僚との関係が悪かったから」は4.4ポイント、「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」は5.7ポイント減少している。

一方、「仕事上の大きなミスをしたから」は、4.8ポイント増加している。



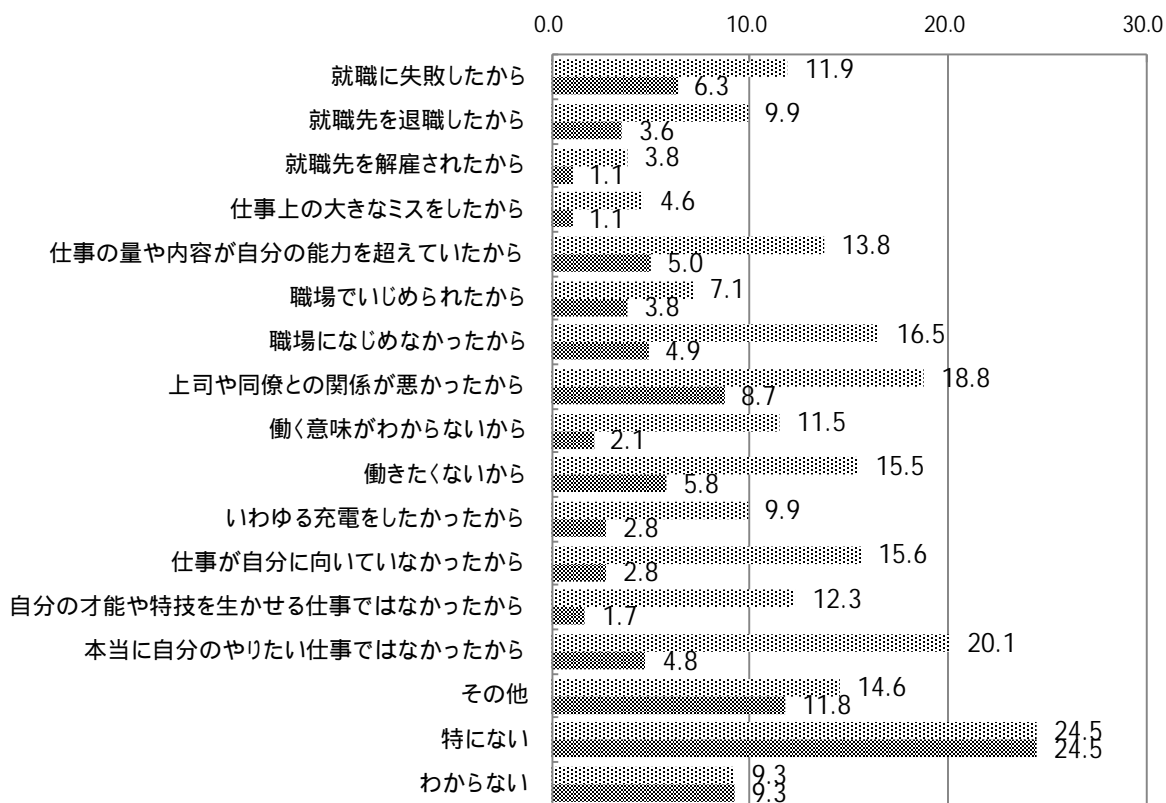
Q5で「あった」「どちらかといえばあった」かつ

職業経験の設問で「現在就業している」「現在は就業していないが、過去に就業経験がある」との回答者のみ回答

<平成 24 年度調査結果>

Q. そうした問題を経験した主な理由は何ですか。当てはまるものを全て選択してください。
また、各項目の中で一番主要なものを教えてください。[MA・SA]

【仕事】



● 当てはまるものを全て ■ 各項目の中で一番主要なもの

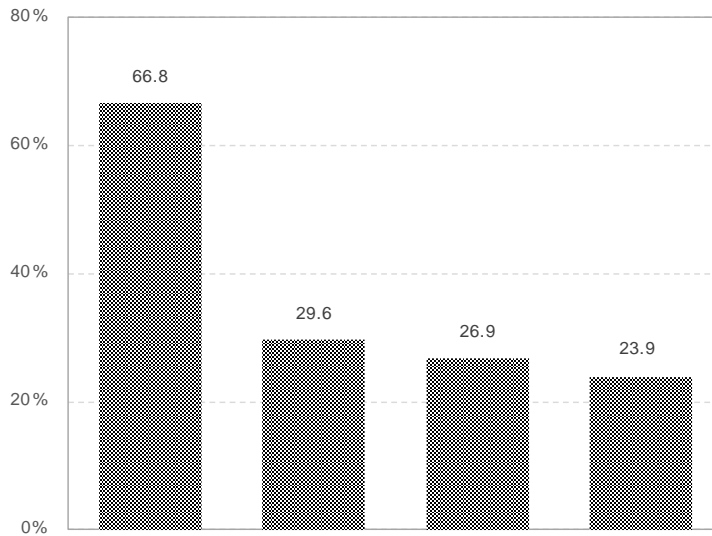
(n=756)

Q6-2. そうした問題を経験した事柄の中で、特に影響が強かったと思うことは何ですか。(2つまで) [MA]

問題を経験した事柄の中で、特に影響が強かったと思うことについて全体で最も高いのは、「自分自身の問題」(66.8%)。次いで「学校の問題」(29.6%)と続く。

年齢区分別でみると、「学校の問題」は「13～14歳」(38.5%)、「15～19歳」(36.6%)が全体と比べ高く、有意差が認められた。

「仕事・職場の問題」は「25～29歳」(32.6%)が、全体と比べ5ポイント以上高く、有意差も認められている。



全体 + 10%以上 全体 - 10%以下 (属性n=30以上)	n数	自分自身の問題	学校の問題	家族・家庭の問題	仕事・職場の問題
全体	4,931	66.8	29.6	26.9	23.9
13～14歳	379	63.9	38.5	23.0	12.5
15～19歳	1,494	67.5	36.6	28.4	6.8
20～24歳	1,439	67.2	29.3	27.1	21.8
25～29歳	1,619	66.5	21.3	26.2	32.6

Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答

「仕事・職場の問題」のみ就労経験ありの人にもみ表示させているため、就労経験がある人を母数として割合を算出

(全体：n=3383、13～14歳：n=16、15～19歳：n=631、20～24歳：n=1202、25～29歳：n=1534)

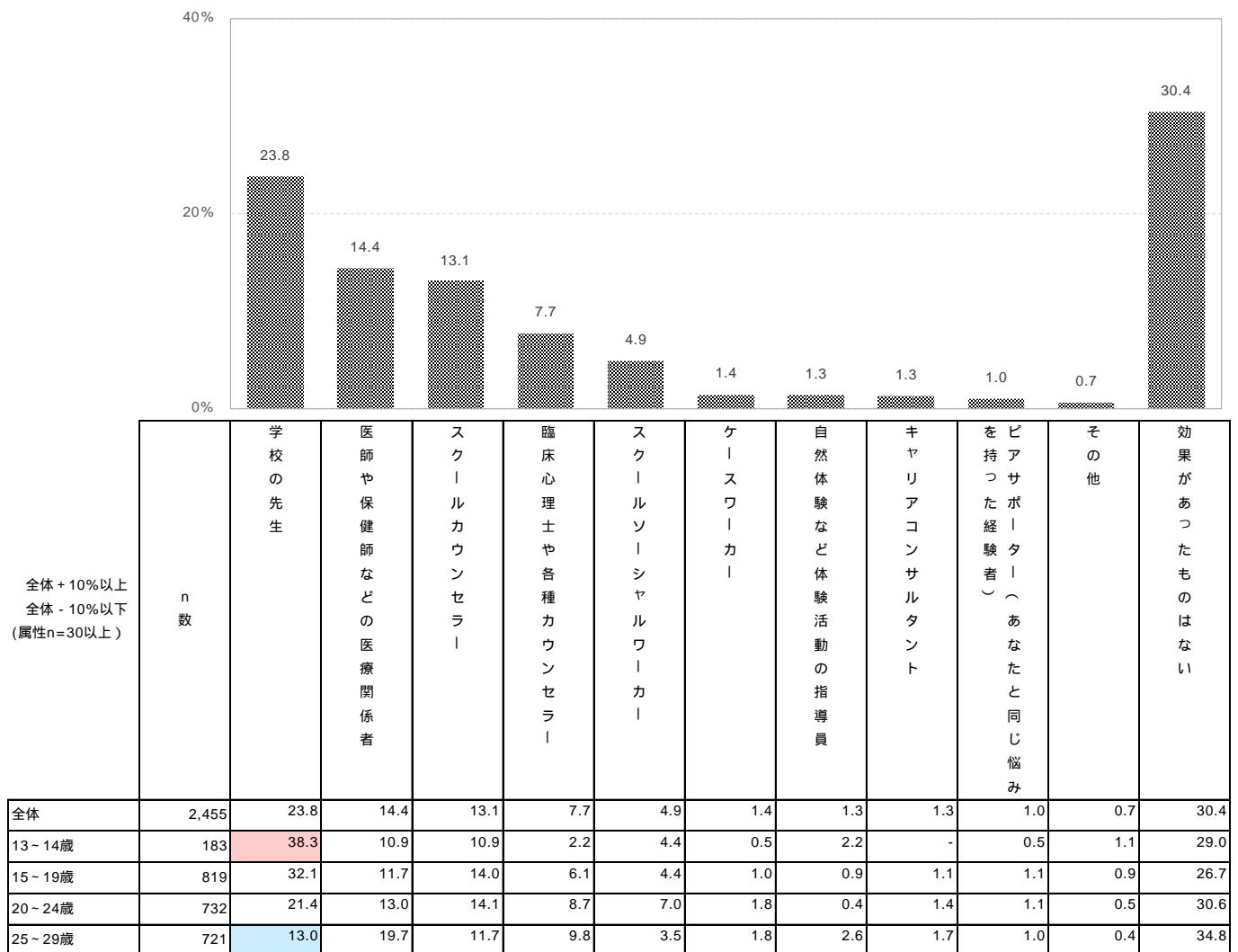
(3) 受けたことのある支援

Q7-2. (社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験があったと思う場合で、かつ、次のような方からの支援を受けたことがある場合) その中で最も役に立ったと思うものを一つ選んでください。[SA]

支援を受けて役に立ったと思う人について全体で最も高いのは、「学校の先生」(23.8%)。次いで「医師や保健師などの医療関係者」(14.4%)、「スクールカウンセラー」(13.1%)、「臨床心理士や各種カウンセラー」(7.7%)と続く。一方、「効果がなかったものはない」は30.4%だった。

年齢区分別で見ると、「学校の先生」は全体と比べ、「13~14歳」(38.3%)が10ポイント以上高く、「25~29歳」(13.0%)は10ポイント以上低くなっており、どちらも有意差が認められた。「25~29歳」では、「医師や保健師などの医療関係者」が19.7%と最も高く、全体比較しても有意差が認められている。

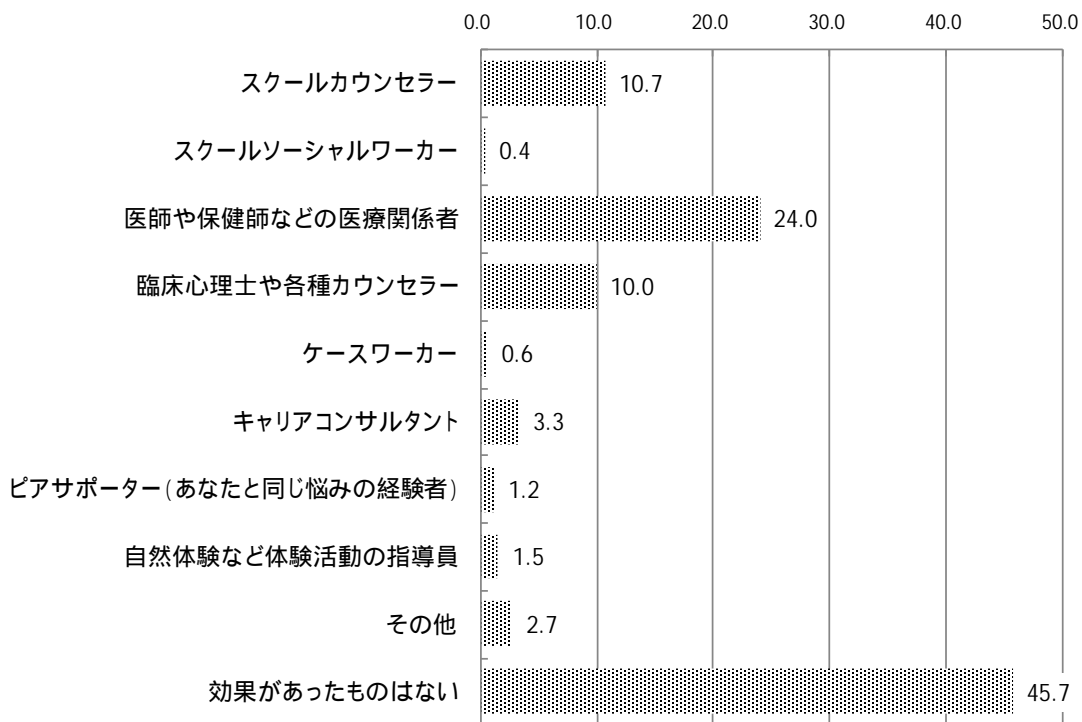
過去の調査と比較すると、「効果がなかったものはない」は15ポイント以上減少しており、「スクールソーシャルワーカー」は4.5ポイント増加している。一方、「医師や保健師などの医療関係者」は9.6ポイント減少している。



Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者で、かつ、Q7-1で「支援を受けたことがない」との回答者以外が回答

<平成 24 年度調査結果>

Q. (社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験がある場合で、かつ、次のような方からの支援を受けたことがある場合) その中で最も効果があったものを1つ選んでください。[SA]

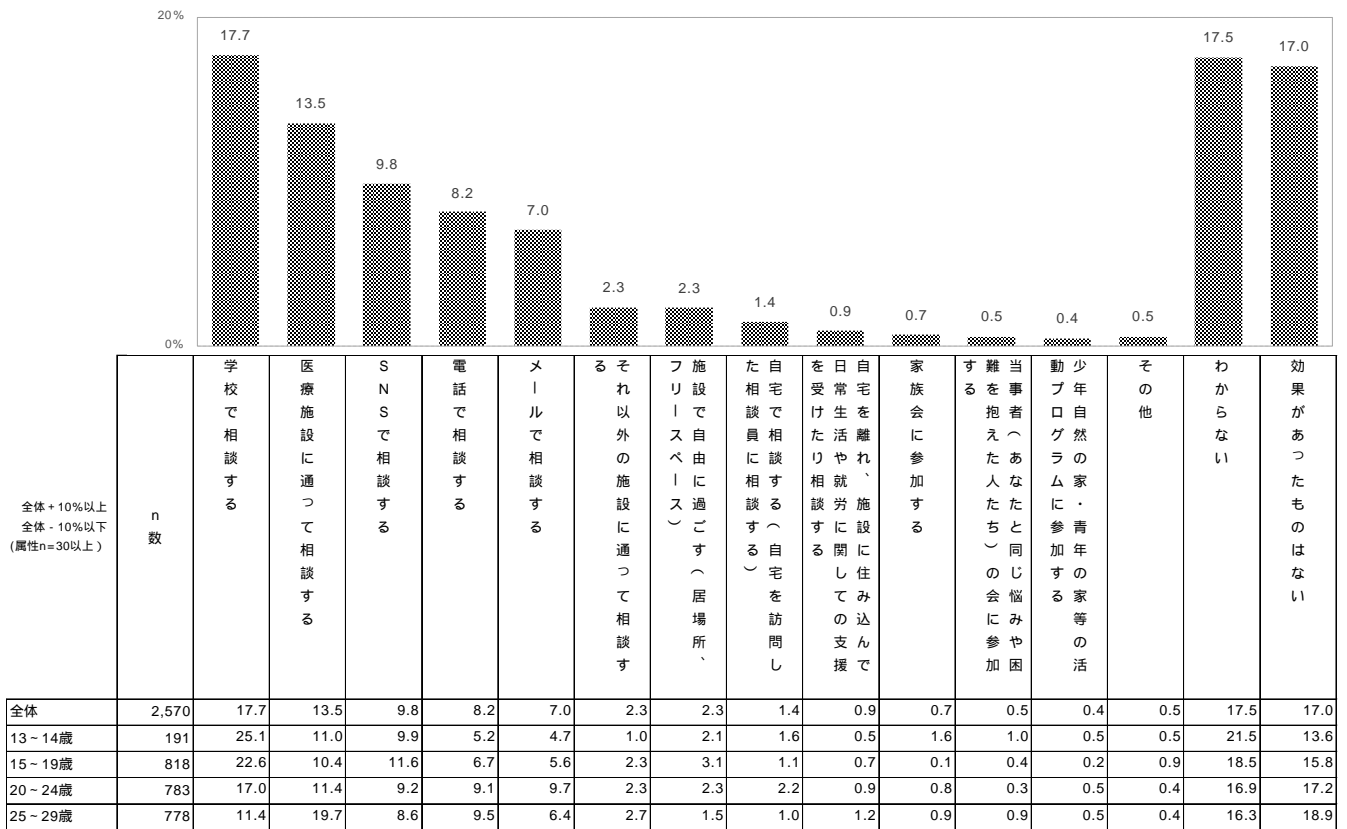


(n=521)

Q8-2. (社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験があったと思う場合で、かつ、次のような形での支援を受けたことがある場合) その中で最も役に立ったと思うものを一つ選んでください。[SA]

受けたことのある支援で役に立ったと思うものについて全体で最も高いのは、「学校で相談する」(17.7%)。次いで「医療施設に通って相談する」(13.5%)、「SNSで相談する」(9.8%)、「電話で相談する」(8.2%)と続く。一方、「効果がなかったものはない」は17.0%だった。

年齢区分別でみると、「学校で相談する」は年代が若いほど高くなっており、「13～14歳」(25.1%)、「15～19歳」(22.6%)は、全体と比較した結果、どちらも有意差が認められた。また、「25～29歳」では、「医療機関に通って相談する」(19.7%)が最も高く、全体と比較しても有意差が認められる。

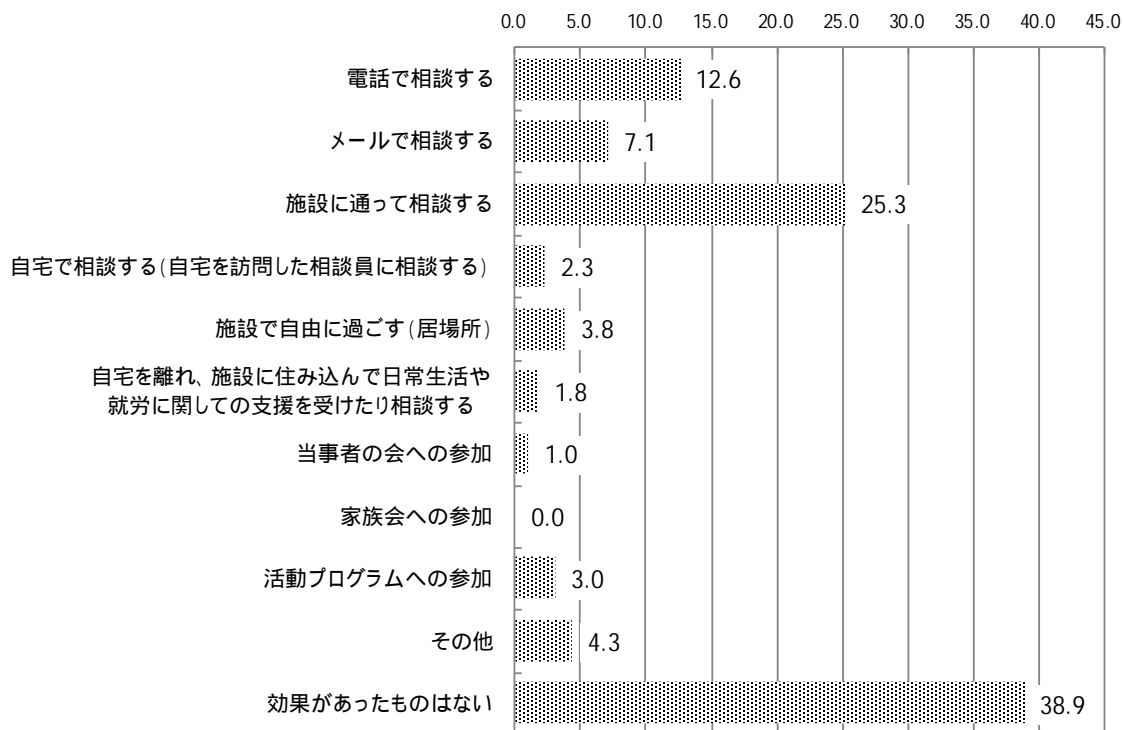


Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者で、かつ、Q8-1で「わからない」「支援を受けたことがない」との回答者以外が回答

<平成 24 年度調査結果>

Q. (社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった経験がある場合で、かつ、次のような支援を受けたことがある場合) その中で最も効果のあったものを1つ選んでください。[SA]

(n=396)



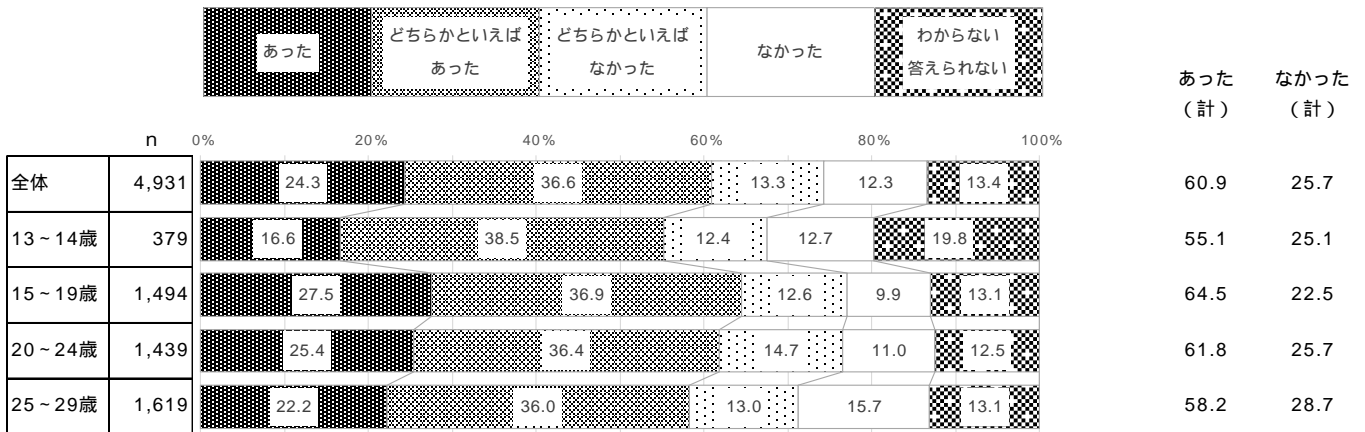
(4) 円滑に送ることができていなかった状態が改善した経験

Q9-1. あなたは今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった状態が改善した経験があったと思いますか。[SA]

社会生活や日常生活を円滑に送ることができていなかった状態が改善した経験（以下「困難改善経験」という）について全体で最も高いのは、「どちらかといえばあった」（36.6%）。次いで「あった」（24.3%）と続く。また、「あった（計）」（60.9%）は「なかった（計）」（25.7%）より高くなっている。

年齢区分別でみると、「あった（計）」は「15～19歳」（64.5%）が他の年代と比べ最も高く、全体と比較した結果、有意差が認められた。

一方、「なかった」は「25～29歳」（15.7%）が他の年代と比べ最も高く、全体と比較した結果、有意差が認められた。

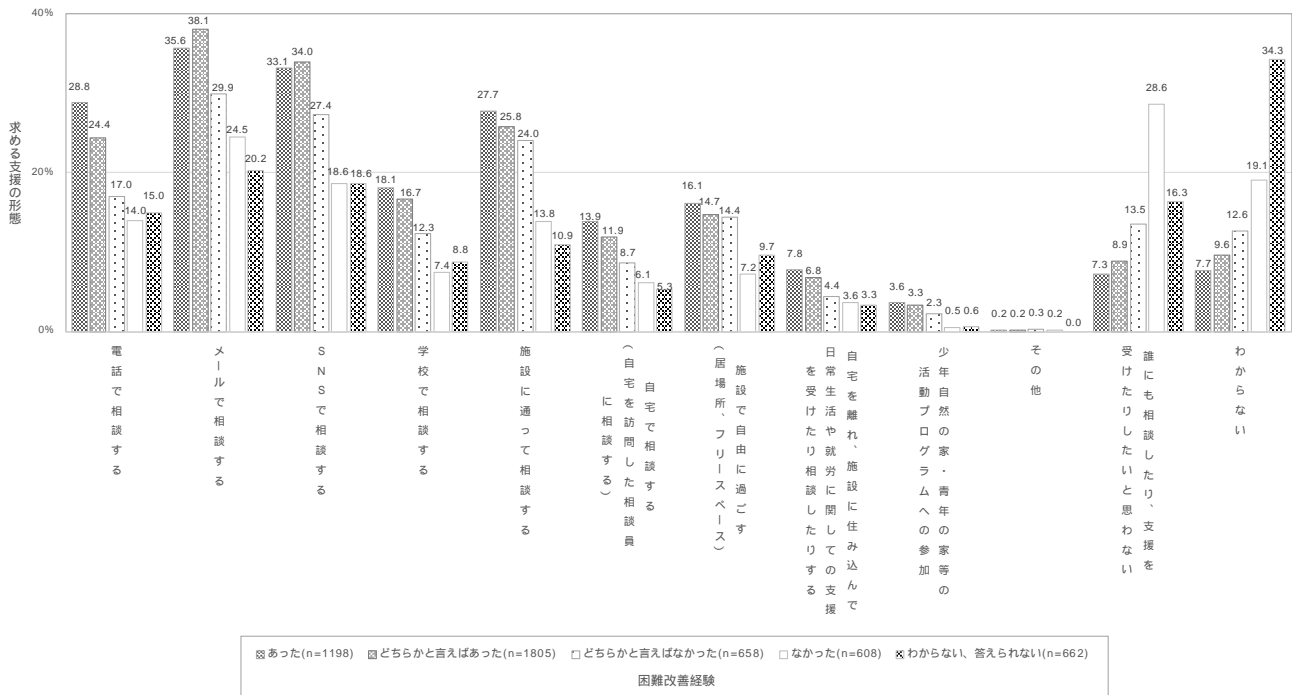


Q5で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答

Q9.の回答について、公的な支援機関や専門家から支援を受ける場合の求める支援の形態の別（Q22）にみると、困難改善経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の方が、困難改善経験が「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答した者と比べて、支援を求めている割合が高くなっている傾向がある。

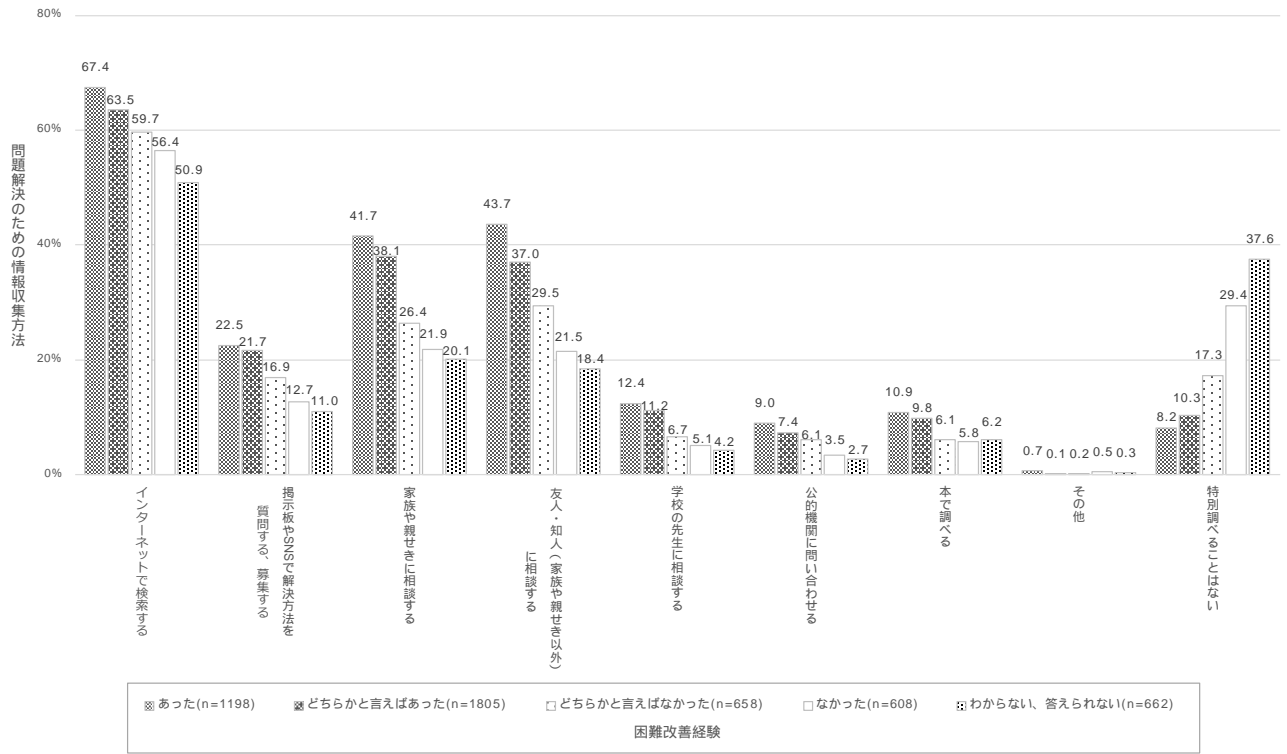
一方で困難改善経験が「どちらかといえばなかった」と回答した者については、「メールで相談する」（29.9%）が最も高く、次いで高いものは、順に「SNSで相談する」（27.4%）、「施設に通って相談する」（24.0%）、「電話で相談する」（17.0%）と続く。

また、困難改善経験が「なかった」と回答した者については、「誰にも相談したり、支援を受けたりしたいと思わない」（28.6%）が最も高く、次いで高いものは、順に「メールで相談する」（24.5%）、「わからない」（19.1%）、「SNSで相談する」（18.6%）と続く。



Q9.の回答について、問題解決のための情報収集方法の別（Q24）にみると、いずれの情報収集方法についても、困難改善経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答したの方が、困難改善経験が「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答した者より、選択した割合が高くなっている。

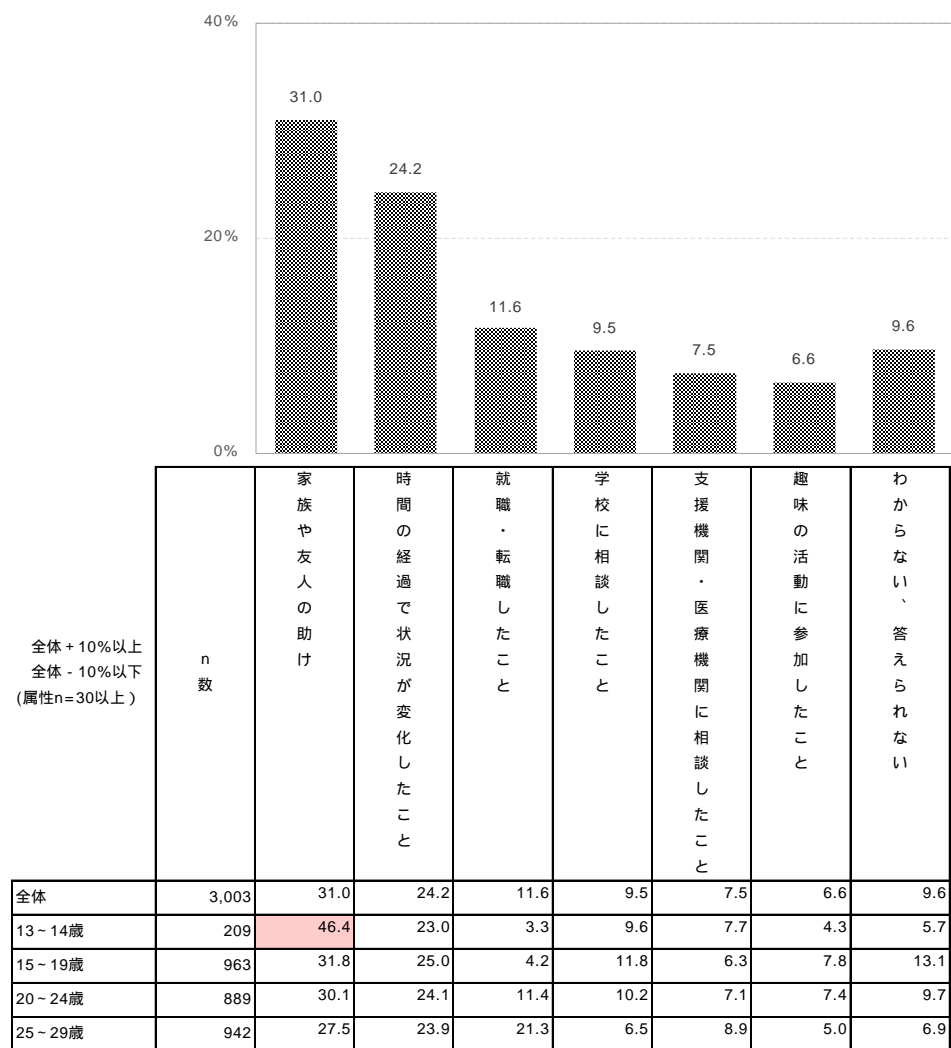
また、「特別調べることはない」については、困難改善経験が「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答したの方が、困難改善経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者より、選択した割合が高くなっており、困難改善経験が「なかった」と回答した者の29.4%が「特別調べることはない」と回答している。



Q9-2. そのような改善した経験はどのようなことがきっかけだったと思いますか。[SA]

改善したきっかけについて全体で最も高いのは、「家族や友人の助け」(31.0%)。次いで「時間の経過で状況が変化したこと」(24.2%)、「就職・転職したこと」(11.6%)と続く。

年齢区分別でみると、“13～14歳”は「家族や友人の助け」(46.4%)が、全体と比べ15ポイント以上高く、有意差も認められている。また、「就職・転職したこと」では、“25～29歳”(21.3%)が他の年代に比べ10ポイント近く高く、全体と比較しても有意差が認められている。



Q9-1で「あった」「どちらかといえばあった」との回答者のみ回答